

AMUSEMENT SQUARE stage

今年が九十九年だなんて笑っちゃう。一年前には思ってもみなかったよ、そんなこと。今年が九十九年だなんて、まさか、そんなことになるなんて、なんだかしみじみしちゃう。夜、ひとり立って月を見るような、そんな気分。そう言えば、近頃見てないね、月。色や月影はとうてもいいから、まったく完璧な月を見た。い。

卯年でしょ。今年。うちの婆さん卯年生まれ。今年で満八十四歳。九月の誕生日まで生きてればの話だけ。月が満ちては欠けてくように完全なる生つての無いなら、死すれば完全な上手ののかな。うさぎの絵を書くのが上手だったから、というより、それしか書けなかったから婆さんの干支を覚えてるんだけど、そのうち月の裏でも

会えるかしらね。婆様の描いた絵で、うさぎが大繁殖してる月の裏で。うさぎが描けない祖母はうさぎが食べません。

今年が平成十一年ってのも何だか寂しい。去年、財布の中に平成一〇年製造のコインが見当たらなかった。だから、もしかしたら、まだ平成一〇年はきてないのかもしれない。ほんとに今年が九十九年なの？ だれかがほんとに平成十一年なの？ ほんとに今年が平成十一年なの？ 太陽や星の周期とほくら地球の時間が、そろそろずれてきてるんでないの？ ほんとのこと話を話して。だれか、ほくらを、はやく月に、つれてって。

3、2、零、ドーン。

どーん、と、来い。

長尾広海が書いたこの『パズル』と題された物語ならぬ物語が、いつそ月世界のお話ならいいのにと思うのです。もちろんSFにしたいわけではありませんが、月の裏側でなら、見えない月の裏側でなら、わたしたちにとって思いもよらないことが現実起こったり、わたしたちの眼や耳を疑うような不思議なことが、ごくごく当然のこととして行われているような気がするのです。

長尾は、とあるマンションの最上階に舞台を設定しました。隣合った三つの部屋。それぞれが『パズル』の枠であり、完成された図柄であり、ひとつひとつのかけらになるわけです。不思議なのは、このマンションには砂が降るってことです。窓の外から、飛んできた床から湧いてくるのかかわらないのですけれど、とにかく気がつく、部屋に砂があるのです。それもカラカラに乾いた黄色い

砂。そんなおかしなマンションのある夜。窓の外に月を見ることができないある夜の、ほんの少しの時間。停電で世界の光が消えてしまふまでの、ほんの束の間が舞台の上に『パズル』として作られていきます。

三つの部屋には、もちろん、そこで暮らす人たちが、それぞれいるわけですが、その人たちは、ほんの少し変わっています。あくまでわたしたちの一般的な眼で見ればという意味ですが。

真中の部屋には夫婦が棲んでいます。妻は夫に語りかけますが、夫の返事はかえってこない。部屋に夫がいないのかといえ、そうでもない。脱ぎ捨てられたバジャマ、読みかけの新聞、食べ終わりがげられた食器、痕跡はいたるところにみえるのだけど。声も聞こえなければ姿も見えない。彼女は、自分が寝た後に帰ってきて、眼を覚ますまに仕事にでかける夫の抜け殻と、黄色い砂とともにこの

部屋で暮らしているのです。見えない夫によって、一人暮らしな夫婦生活をおくる彼女の片方の隣人。部屋で、オルゴールを奏でるこの男性もまた、ひとりです。といっても、奥さんが透明人間なわけではなく、いわゆる単身赴任のようです。彼は専ら携帯電話で、奥さんと娘たちと話をしています。が、彼の電話は言ってみれば未来型通信機器で、呼出音も鳴らなければ、ダイヤルする必要もありません。ふと、つながり、目的の人と話しができるのです。だから、ひよっとすると、この男は単身赴任中なわけでもなく、ひよっとすると家庭も持っていないのかもしれない。ともかく、はつきりしたことはわからないのです。だって、舞台にはなにも登場しないのですから。彼は受話器に向かって、拾ってきた猫の話をします。灰色の子猫。まだ、ミルクしか飲めない子猫。その小さな命が、たった今、終わってしまったこと。砂粒の混じったミルクを吐いて動かなくなってしまった生温かい塊は、名付けれられないまま永い眠りにつき、唯一の同居人を失った男は、一人きり、オルゴールを奏でるのです。残すもう一つの部屋では、二人の女性が共同生活を始めたばかり

です。この二人、掃除もしなければ洗濯もしません。のみならず、料理も買い物もなにもしないので、ただただおしゃべりをしてるだけなのです。このままならきつと、黄色い砂の降り積もる部屋の中で、奥さんと娘たちと話をしています。が、彼の電話は言ってみれば未来型通信機器で、呼出音も鳴らなければ、ダイヤルする必要もありません。ふと、つながり、目的の人と話しができるのです。だから、ひよっとすると、この男は単身赴任中なわけでもなく、ひよっとすると家庭も持っていないのかもしれない。ともかく、はつきりしたことはわからないのです。だって、舞台にはなにも登場しないのですから。彼は受話器に向かって、拾ってきた猫の話をします。灰色の子猫。まだ、ミルクしか飲めない子猫。その小さな命が、たった今、終わってしまったこと。砂粒の混じったミルクを吐いて動かなくなってしまった生温かい塊は、名付けれられないまま永い眠りにつき、唯一の同居人を失った男は、一人きり、オルゴールを奏でるのです。残すもう一つの部屋では、二人の女性が共同生活を始めたばかり

月の裏で待つまじゆ。

テアトロ [be:] 公演「パズル〜タダシサの限界」

〈文／平霞健悦〉

1 月の **Friday Amusement Negative Shop**

※変更の場合もありますので、内容についてはデーリー東北の「あすのメモ」「きょうのメモ」欄でご確認下さい。

■22日・23日・24日
テアトロ [be:] 八戸公演
「パズル〜タダシサの限界」

時間／22日午後8時〜、23日午後7時30分〜、
24日午後2時〜

会場／スペースベン
●脚本：長尾広海 ●演出：平霞健悦
●出演：佐々木真理子、山田景子 他

●テアトロ [be:] 青森・東京公演
「パズル〜タダシサの限界」

●青森公演
9日・10日(9日午後7時30分〜、10日午後2時〜)
会場／青森演劇鑑賞協会事務局
青森市安方2-9-7 ☎0177-22-7944

●「大世紀末演劇祭」(東京公演)
2月1日〜3日(1日午後7時30分〜、2日・3日午後4時〜、午後7時30分〜)
会場／こまばアゴラ劇場
東京都目黒区駒場1-11-13 ☎03-3467-2743

料金(共通):
一般¥2000
(当日¥2300)、
高校生以下¥1200
(当日¥1500)

問 スペースベン
八戸市柏崎1-11-8
☎FAX 43-9876

張られた根があるんだ。だとすれば、砂漠の地下には六〇億の意識のゴーストうごめく沈黙の都市がある。出会うはずのない人たちが突然、で、会う。砂漠の下で、月の裏で、本人たちの知らないところで知らず知らず、幻意識のかけらが出会う。なにかを落っこした人たちが、たまたまここで、たまたま遭遇しただけ。

ソ〜グー。so good、

彼らはほからの兄弟だ。ペー